

藪椿

初夏の光を受けてヤブツバキの葉がキラキラ輝く季節です。春の盛りまで見られた花はすっかり終わり、受粉していれば夏にかけて、赤みの差すつややかな実がぷっくりと膨らんでいきます。その堅い実は秋に熟し、三方に割れるとこげ茶色のコロンとしたタネが顔を出して、やがて地面に落ちていきます。

日本固有種であるヤブツバキは東北まで見られ、暖地性のツバキ属では北限となっています。西日本の森に例外なく生育するため、その常緑樹林の植生を「ヤブツバキクラス域」とも呼びます。タネに含まれる「椿油」は日当たりがあまり良なくても生長できるように蓄えられたもの、常緑樹林に適応した姿なのでしょう。

樹木のタネの寿命の多くは親木の寿命に反比例するといわれます。長生きするヤブツバキのタネは乾燥に弱く、すぐに発根できるかどうかは運命の分かれ目のようです。一方、タネを守っていた実は木質化して殻のようになり、三枚の羽を広げた形で長く枝に残っています。

夏を越す頃、新しい枝の葉腋にはもう蕾が付き始めます。花はらせん状になった苞葉と萼片が花びらまでつながる原始的な形で、中心部から鳥を誘う甘い蜜を分泌します。蕾が膨らんで外側の花びらに色がつくと、待っていましたがばかりにムササビに齧られるのも毎年のことです。花期は長く、間にしばしの休憩を入れながら冬前から春まで咲き続けます。春、2・3年使った葉が落ちる準備に黄色くなる頃には一段と多く、花の赤と、現役の葉の緑と、古い葉の黄の三色が同時に見られる時期もあります。

ポトリと落花するため合弁花のようですが、離弁花の基部が雄蕊も一緒に合着している姿です。鳥を頼みとする花は、蜜を横からつかれないよう固く合わさってメジロやヒヨドリの足場にもなりながら、その嘴や顔に花粉がついて他の木へと運ばれていくよう、ややすぼんだ形をしています。落花直後の枝には、咲いているときには目立たなかった雌蕊がすっきりと残っているでしょう。

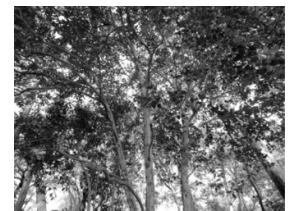
花が、落ちてもお地面を赤くしているのは裏返るものが少ないため、寺田虎彦は上を向いて着地する確率を物理学的に解明しました。きっかけとなったのは、「落ちさまに 虻を伏せたる 椿哉」という夏目漱石の句です。春の花に成虫越冬のナミハナアブが訪れ、雄蕊につかまっただま落ちて重心が変わり「伏せたる」興を表したのでしょうか。小さなアブが花粉を媒介するのかわかりませんが、落花の雌蕊が外れた部分は穴になっているので、そこから脱出する様が想像させられます。

花も葉も地面に堆積すれば、秋にツバキキンカクチャワシタケが菌核をつくり、1～3月に茶碗状のきのこを出します。花の時期に子実体を伸ばして胞子を飛ばすのは咲いている花に取り付くためかもしれず、なんとも不思議な存在です。

ヤブツバキの材は緻密で堅く、太古から利用されてきました。縄文時代の鳥浜貝塚出土の櫛は有名です。優れた薪炭材でもあったほか、材の灰は漆器の研磨に、枝葉の灰は釉薬に媒染に、タネの油は食用に髪用にと、重用されてきました。

一方、花の存在感からまつわる風習や逸話も多く、「八百比丘尼」伝説には霊力さえ感じさせられます。比丘尼が入定したとされる福井県小浜は東大寺へお香水を送る神事「お水送り」が続く地でもあり、毎年3月2日、遠敷川上流の鶴の瀬に神聖な水が注がれます。地下水脈を通って10日後に若狭井に届くというその水を受け取る行が「お水取り」、その法要では、紅花で染められた400個もの和紙の椿が二月堂に供えられます。

法然院も椿の多いお寺です。中庭の三銘椿（五色散り椿、貴椿、花笠椿）も見事で、花は散華にも使われます。参道の石碑には「椿落ちて 林泉の春 動きけり」という松尾巖の句が彫られています。



観察の森のヤブツバキ
樹皮は白っぽく目立ち
葉の縁に細かい鋸歯がある



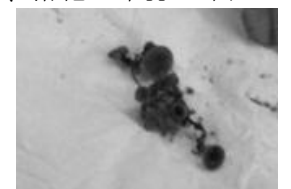
去年の実 2016.6/8



今年の実 2016.6/24



落ちた花 2016.4/3



菌核と子実体 2013.3/24



「染司よしおか」によって
染められた東大寺の造り花